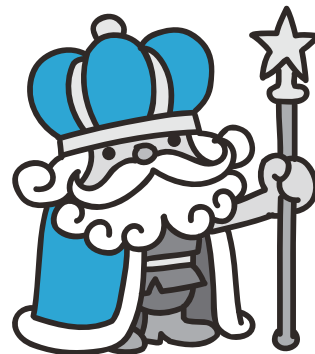


ちょっと ブレイク しませんか?



第 34 回 「ローマ法王の休日」 [2017年 7月]

イソップ寓話集に「ライオンの治世」と題する小話がある。

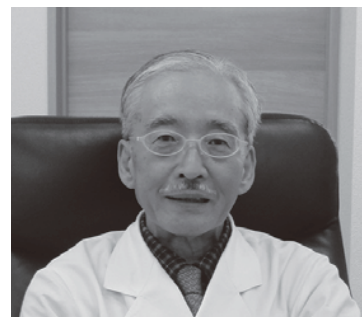
あるライオンが王位につくことになった。怒りっぽくなく残忍でもなく、万事暴力で決することを好まず、人間の誰かさんのように穏和で正しいライオンだった。話によると、その治世に野に棲む動物たちの集会有って、お互いに罪の償いをしたりされたりしたという。狼は羊の、豹は八木の、虎は鹿の裁きを受けるという具合に、皆が裁きに復し、皆が平和の裡(うち)にあったので、臆病者の兎はこう言った。「この日の来るのをずっと祈っていたのです。弱い者が猛き者にも恐れられる、そんな日を」

もう一つ王様選びについては「駱駝と象と猿」という小話もある。

物言わぬ動物たちが王を選ぼうとした時、駱駝と象が立候補して争った。一方は体の大きさゆえ、他方は力の強さゆえ、皆を圧して選出されることを期待していた。ところが猿は、両方とも不適格だと言う。駱駝は悪事を働く者に対して怒らないし、象は仔豚を怖れるので、象が王になれば仔豚が襲ってくるかもしれない、という訳だ。

首長選挙、議員選挙、重役選出など春は人事で大忙し。一息ついたこの夏に紹介するのは「ローマの休日」ならぬ「ローマ法王の休日」。ローマ法王の逝去後に選ばれた新法王が恐れをなして逃げてしまうというコメディだ。前法王の葬儀に始まり、世界各国から参集した枢機卿達がコンクラーベ(法王選挙)へ向かう。発音だけでなく意味も日本語に似ているので憶えやすい。3分の2の賛成票を得る者が出るまで投票は続く。枢機卿達は皆「どうか、私が選ばれませんように」と願う。予想に反して新法王にメルヴィル枢機卿が選ばれ、驚きの結果に動揺を隠しきれない。グレゴリー枢機卿から「汝の法王選出を受け入れるか?」と問われ返答に窮するが、断り切れない雰囲気の中で遂に受諾してしまう。サン・ピエトロ広場で、新法王の誕生を待つ人々の前で演説をするはずのメルヴィルは、強い緊張感や重圧感に耐えられず遁走。一人でローマの街を彷徨い、街の人々との触れ合いを通じ「法王」の存在意義について思案する。ようやく新法王として信者たちの前に登場したメルヴィルは、「自分は導く者ではなく、導かれる者である」と自戒と謝罪の言葉を残し姿を消すのであった。

なりたがりになれなくて、なりたくない人が選ばれることもあるのがトップ人事だ。肝心なのは就任後で、力不足と酷評される試練も覚悟しなくてはいけない。役不足と褒められることは稀だ。国家元首が世襲となると暗殺やミサイル発射も平然と行うから怖い。国民投票で選ばれても移民排斥を断行する大統領にも困ったものだ。イソップの時代よりも人類は退化したのかも? とここで、この映画の原題は「Habemus Papam」(我ら法王を得たり)、過去の名作にあやかった邦題名でも興行成績はいまいちだったとか。良い製品が繁用されるとは限らないので商工界も苦労が多い。



かゆ かわ ゆう へい
粥川 裕平
(精神科医・映画評論家)

名古屋工業大学 名誉教授
かゆかわクリニック院長